

信仰者の行き着くところ

(哀歌3・21〜27)

一、哀歌について

『哀歌』は、読んだだけで分かりますように詩歌、すなわち詩ですが、なぜか預言書であるエレミヤ書に次に置かれています。その理由は、キリスト教会が用いている旧約聖書の配列にあります。ヘブライ語(ヘブル語)の聖書では、旧約は、律法・預言者・諸書という三つの区分の、「諸書」に入っています。『哀歌』がエレミヤ書の次に入られている理由は、ヘブライ語聖書のギリシア語訳である七十人訳で、「哀歌」の序文に、「イスラエルの捕囚と、エルサレム崩壊後、エレミヤは泣きながら座し、エルサレムについて哀歌を歌った」と書かれているからです。ですが、そこに書かれていることは、根拠のないことであると考えられています。そもそもエレミヤ書が編集された時点で、「哀歌」がエレミヤの作であると受け止められていたら、エレミヤ書の中に集録されていたはずで。

『哀歌』の作者は不明です。ですが、バビロン軍によってエルサレムとユダの住民が捕虜として連れて行かれ、エルサレム神殿が破壊されたことを嘆き悲しんだ、ユダヤ人のだれかが――一

人か複数名か――書いたことは間違いないと考えられます。

キリスト教会が用いた聖書は、七十人訳の配列に沿ったために、「哀歌」がエレミヤ書の次に置かれました。また、「哀歌」という書名ですが、これは『漢訳聖書』に做ったものです。

二、人に授けられたいのち

哀歌を読みますと、暗い、重たい気持ちになるかも知れません。何せ、南国ユダがバビロン軍に滅ぼされ、神殿が破壊され、住民がバビロンの地に連れて行かれたという背景があるからです。

ですが、著者かことん暗い、重たい表現を語ることができたのは、主にあつて希望を見いだしていたからです。希望を見いだしていなかったら、悲惨なことは書けませんから。哀歌の作者たちは「私たちには主が共におられて、支えてくださっている」というところにたどり着いていたからこそ、悲惨なことも赤裸々に表現することができました。

三、神がなされる不思議

きょう与えられたテキストを見てまいります。3章20節です。〈私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。〉とあります。3章は、1節から20節までが嘆きの詩です。

3章は嘆きから始まります。1節、2節、3節に、〈私は、主の激しい怒りのむちを受けて苦しみにあつた者。主は、私を連れ去り、光のない闇を歩ませ、御手をもって一日中、繰り返し私を攻められた。〉とあります。(ここに現れる〈私〉は、哀歌3章の作者ですが、作者は自分のことだけを語っているではありません。むしろ〈私〉は、〈主の激しい怒りのむちを受けて苦しみにあつた者〉のひとりであり、ひいては〈私〉という個人を超えて、主を神と仰ぐイスラエルの共同体です。

こうして、イスラエルの嘆きは続きます。4節、5節、6節です。〈主は、私の肉と皮をすり減らし、私の骨を砕き、私に対して陣を敷き、苦味と苦難で私を取り巻き、私を暗い所に住まわせられた。はるか昔に死んだ者のように。〉と。作者は、すなわちイスラエルは、どん底にありました。何せ、そのような状況を許されたのが主ご自身ですから。

こうして作者、すなわちイスラエルの、苦しみと悶えは続きます。7節、8節、9節です。〈主は私を囲いに入れて出られなくし、私の青銅の足かせを重くされた。私が助けを求めて叫んでも、主は私の祈りを聞き入れず、私の道を切り石で囲み、私の通り道をねじ曲げられた。〉と。この苦しみの描写が、20節まで続きます。〈私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。〉と。

ですが、21節に不思議な回復が表れます。21節より22節の始めです。〈私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。主の恵みを。」と。21節は、口語訳と聖書協会共同訳は、「しかし」という、原文にはないことばを補足しています。21節の聖書協会共同訳は、こうです。へしかし、そのことを心に思い返そう。それゆえ、私は待ち望む。と。「しかし」を入れることによって、作者の思いが一変したことを捉えやすくなります。

作者には、すなわちイスラエルには、自分たちが置かれている状況がどのように見えたのでしょうか。22節2行目から24節までを見てまいります。〈実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は偉大です。主こそ、私への割り当てです」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。〉とあります。

信仰とは神を信じることです。神を信頼することです。主イエス・キリストを信じ、信頼することです。神を信じますと、不思議な変化が訪れます。「大丈夫なんだ。今起こっていることは、私共の思いを超える、神の大きな御思いの中で起きていることである」と、確信できるように導かれます。そうであるなら、私共がなすべきは何かが見えてまいります。主を待ち望むことです。